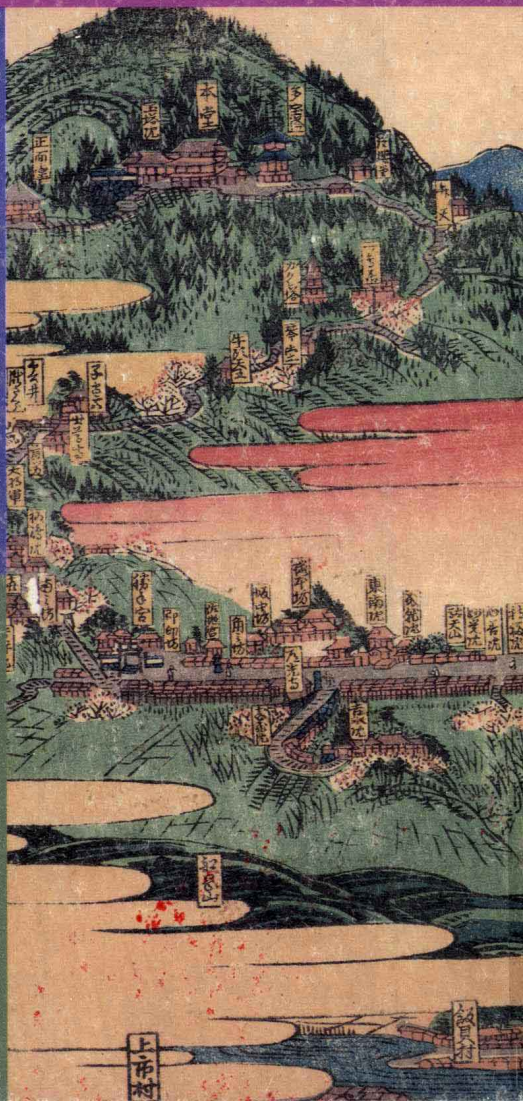
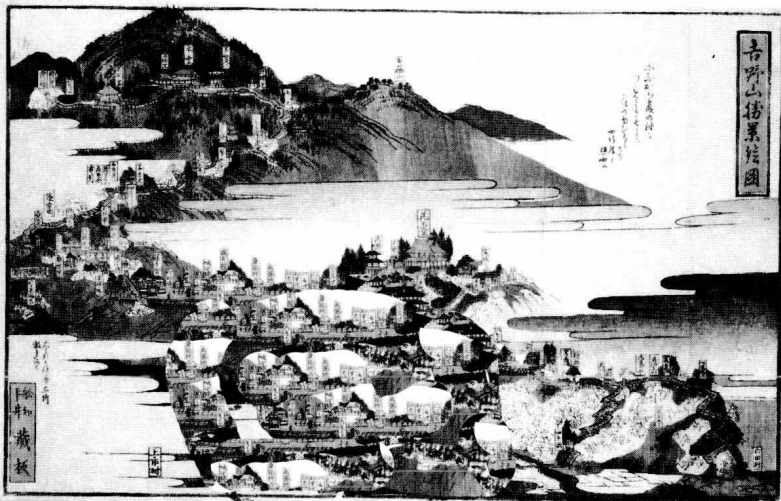


# 吉野の 文学





# 吉野の 文学

大阪成蹊女子短期大学  
国文学科研究室 編

和泉選書

## 資料提供

吉野町観光課・『旅に出たくなる地図』（帝国書院）・大和信用金庫  
藤田浩（口絵写真）

## 参考文献 \*ごく基本的な文献に限った。

- 『大日本地名辞書-上方-』（吉田東伍）改訂版 1969（昭和44）年  
『大和志料-奈良県編-』 1914（大正3）年  
『日本地誌-第13巻-』 1976（昭和51）年  
『日本歴史地名大系30』 1981（昭和56）年  
『奈良近代文学事典』（浦西和彦・浅田隆・太田登） 1989（平成元年）年  
『奈良県史』（同編纂委員会） 1984（昭和59）年以降  
『吉野町史』（同編纂委員会） 1972（昭和47）年  
『奈良県史料』（同刊行会） 1977（昭和52）年以降  
『吉野風土記』（吉野史談研究会） 1956（昭和31）年  
『吉野路』（樋口昌徳） 1979（昭和54）年以降

---

## 吉野の文学

和泉選書65

1992年6月10日 初版第一刷発行◎

編者 大阪成蹊女子短期大学国文学科研究室

〒533 大阪市東淀川区相川3-10-62

電話 06-340-1515（内線410）

発行者 廣橋研三

発行所 和泉書院

〒543 大阪市天王寺区上汐5-3-8

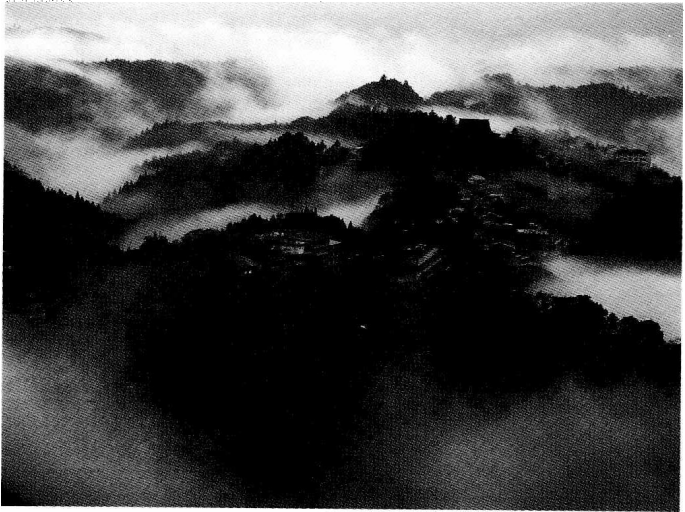
電話 06-771-1467

振替 大阪 7-15043

印刷・木下印刷所 製本・小幡製本

---

ISBN4-87088-534-4 C1395 定価はカバーに表示



吉 野 山

## はしがき

吉野の山河は四季折々に美しい。そして、時代、時代に美しく哀しい。まこと吉野は、上代から近代に至るまで、我国各時代の歴史と文学に深いかかわりを持ち続けて、現代に至るも、多くの文人墨客を惹きつけ、秀れた文学を生む舞台を提供してきた。宮城の地でもない吉野が、である。ここで我々は、「何故、吉野が」という疑問に逢着する。本書は、こうした疑問を考え、また実地に吉野を採訪するための手引となることを願って、編まれたものである。

本書の各章の章題やコラムのタイトルを瞥見すれば、吉野の地を縁取るいくつかのキー・ワードが浮かび上がってくる。山、水、信仰、かくれ里、花、そして遊興。思うにこれらは、時代を通じて日本の文化や文学を生む源泉となってきたものではなかったか。とすれば、吉野はまさしく日本人の魂の原郷たる資格を備えた地であったとも言えるであろう。

吉野の地に立って、都城からの距離を実感するとともに、重畳たる山なみから立ちのぼる雲や霧を見、その山なみの遥か彼方に連なる大峰の山に想いを馳せつつ、各時代の作品に接すれば、一般の花見客が一顧だにしない吉野の地名や、古びた小道や一木一草までもが、にわかに関心するものとなるであろう。古くは大海人皇子が、そして中世には義経主従が、何故吉野山の懸道をたどったのか、歌僧西行が何故この山の桜を恋してやまなかったのか、吉野の地に立ってみると、自然に胸に落ちて

くるものがある。まさに文学の实地踏査の醍醐味である。

吉野は四季それぞれの美しさを見せつつ、文学の世界では雪や花とともに、取り上げられることが多かった。季節美の代表ともされる清浄の雪、優艶の桜との結びつきが、吉野の文学を一際哀婉なものとした。加えて、「歌書よりも軍書に悲し」とされるこの地の悲劇の歴史が、吉野を日本人好みの文学の故地へと押し上げていったと言えるであろう。

本書は、大阪成蹊女子短期大学国文学科が三十有余年恒例としてきた吉野行のテキストを原拠としつつ、幾度かの増改訂を経て、このたび想も新たに稿を改め、公刊に漕ぎつけたものである。この間、多くの先生方から賜った御協力に深甚なる謝意を表したい。

本書は、大学の教室や臨地講義における教材たることを意図したものであるが、あわせて一般読書子の利用にも広く供しうるよう考慮して編纂した。従って、各資料の本文は、多くは公刊されたものに依拠したが、車中や現地での通読の便を考えて、一部表記を改め、漢文は原則として漢字交り平仮名の読み下し文とした。なお、本書のために新たに翻刻した資料もある。以上の趣旨から、脚注は必要最小限にとどめることとした。むしろ読者が、現地での体験や想像力によって、自注を増してゆかれることを願っている。

一九九二年三月一日

# 目次

はしがき

## 第一章 総説

……………

松前

健 1

吉野の地理的景観 2 古代の吉野と記紀伝承 4

雄略天皇の吉野行幸伝承と吉野仙境観 8

諸天皇の吉野行幸とその意味 10

天武天皇の吉野行きと帝王水徳の思想 15

吉野と桜 17 役小角と修験道 20

金峯山と山岳他界の信仰 23 信仰の吉野から花の吉野へ 26

敗者の潜伏の地としての吉野と義経記 28

吉野朝の悲劇と文学 30 近世および近代における吉野 33

第二章 吉野と「見・見る・見ゆ」——上代の吉野——……………生田周史 37

概説 38

古事記 43 日本書紀 44 万葉集 48 懷風藻 68

深い嘆き 56

第三章 花と雪と信仰の吉野 ——中古の吉野——……………原田敦子 71

概説 72

古今和歌集 77 後撰和歌集 79 拾遺和歌集 79

後拾遺和歌集 80 金葉和歌集 81 詞花和歌集 81

枕草子 81 宇津保物語 82 蜻蛉日記 82 枕草子 83

源氏物語 84 栄花物語 84 御堂関白記 85 金銅経筒銘文 90

更級日記 91 夜の寝覚 94 浜松中納言物語 94

狭衣物語 95 日本霊異記 96 今昔物語集 96 扶桑略記 97

み吉野の山のあなたに…… 92

第四章 吉野山やがて出じと — 中世の吉野 — …………… 岡見 弘 101

概説 102

諸山縁起 107 宇治拾遺物語 107 山家集 109

西行上人集 114 山家心中集 115 新古今和歌集 115

新葉和歌集 120 義経記 128 太平記 131 謡曲 144

漂泊のうたびと — 宗良親王 — 118

第五章 吉野路を行く近き世の人々 — 近世の吉野 — …………… 中村隆嗣 147

概説 148

太閤記 153 糸竹初心集 155 一本草 155 衆妙集 155

後撰夷曲集 156 誹枕 157 野ざらし紀行 157

笈の小文 158 曾良旅日記 160 西鶴俗つれく 161

大和廻 162 松の葉 166 義経千本桜 167 菅笠日記 170

新大成系の調 174 餅黄鳥 175 春草堂詩鈔 175

竹外二十八字詩 175 鐵兜遺稿 176 吉野の桜 176

水分の社と宣長（浅野敏彦） 172  
子規と吉野（和田克司） 178

第六章 歌・花・幻想の吉野 —— 近代の吉野 ——  
越前谷 宏 183

概説 184

訪西行庵記	189	吉野の花	190	芳野紀行	192
中辺路万緑	193	旅中日記	195	吉野の山	196
如意輪堂	200	さくら	200	吉野路	203
吉野葛	206	私の貧乏物語	207	短歌	210
〈狐〉の物語 —— 「吉野葛」 ——	208			吉野の春秋	204
					198

年表 ..... 左4

地名・名所索引 左1  
あとがき  
資料提供・参考文献

装幀 森本良成

第一章  
總

說

松  
前  
健



朝（吉野朝）の拠点となった。

日本の文化、政治の中心地は、少なくとも四、五世紀以降、七、八世紀までは、大和盆地であったことは、何人も認めるであろう。

代々の皇都の所在地であった大和盆地の南に位置する、この吉野は、都人士により人跡まれな幽邃の秘境として観ぜられ、その山岳や樹林、溪流は、神霊のうしわく聖地と考えられていた。

吉野は芳野とも表記され、平安初めの『倭名抄』には、「与之乃」と訓んでいた。『古事記』『日本書紀』『万葉集』には、吉野とも曳之努とも記され、ヨシノ、エシノとも言った。その意味は、やはり美称としての「よき野」であつたらしい。

『万葉集』巻一の天武天皇の歌「よき人の よしとよく見て よしと言ひし 芳野よく見よ よき人よく見」は単なる風景讚美の歌ではなく、山河の神霊のこもる聖なる地への国讚めの呪詞と考えてよいであろう。

この神秘的な深山幽谷の靈氣にひたつて、これをながめ、「よし」と嘆じ、「吉野」と名づけた「よき人」とは、おそらく、何等かの神話的人物を指すのであろう。この事跡を追懐しながら、帝は国讚めのことばを発したのであり、それによって、その地のいや栄を祈求したのであろう。記紀・風土記などの到る処に、ある神や天皇、皇子などが、ある地を訪れ、発した国讚めのことばが、地名となった説話を伝えている。例えば『摂津国風土記』逸文に、昔、住吉大神が天下を巡行し、住むべき国を

求めたが、沼名棕の長岡の前（今の住吉大社の鎮座地）に到り、ここは住みよい地だといひ、「眞住み吉し。住吉の国」と讃め称え、神の社を定めたと記され、地名由来譚となっている。吉野にも、そうした地名伝承が、古くから語られていたのであろう。天武の歌はこれを踏まえたのであろう。

## 二、古代の吉野と記紀伝承

神武帝の軍が、南紀の熊野の海岸に上陸し、熊野山中を北に縦走し、吉野河の河尻に到り、阿陀（五条市東部）の地から更に進むと、尾が生えた人物が、泉井の中から出て来、その泉に神異の光があつたので、天皇が尋ねると、「私は国つ神で、名は井氷鹿と申します」と答えた。これが後の吉野首ら（えしのおびと）の祖先である。更に奥に進むと、またもう一人の尾の生えた人物が、岩を押しわけて現われ、「私は国つ神で、名は石押分と申します者の子でございます」と名乗り、天皇に帰順した。これが今の吉野の国巢の祖先であると伝える。これは『古事記』であるが『日本書紀』でも同様な伝承がある。

この国巢（国櫛、国栖、国主とも表記する）人とは、何であろうか。この吉野の奥に住み、原始的な生活様式を保っていた先住民の称である。尾のある人というような記述は、その未開性の説話的表現にすぎない。皇化に浴しない地方の原住民が、土蜘蛛とか熊襲とか蝦夷とか呼ばれ、手足が異常に長かったり、尾が生えたり、とかく動物に近い形で表されているのは、当時の大和の宮廷貴族たちの抱

いていた蛮夷思想によるものである。

しかし、これらの尾のある人は、単に未開の蛮夷とされているのではなく、「井に光あり」と記されているように、一面に靈威を持つ「国つ神」なのであった。泉井の神なのであろう。

イヒカの現れた地は、吉野郡川上村井光であらうとされ、これも国栖の一派の根拠地であったのであろう。『新撰姓氏録』大和国神別の地祇族吉野連（吉野首が天武朝に昇格したもの）の条に、神武帝が、吉野の神瀬から出現した井光女に、問いかけると、「私は天上から降った白雲別神の女で、名は豊御富と申します」と答えたので、天皇は水光姫となづけた。「今も吉野連の祭る水光神これなり」と記されている。尾のある人という表現と、この光り輝く神秘的な水の女神の表現とは、あまりな差異があるが、その子孫とされる国栖人らは、吉野の山河の靈性を、そのまま受け継いでいる超自然的異人なのであった。

国栖人は、何時のころからか、大和宮廷に参向し、種々な土毛（土地の産物）を献上し、またその風俗歌を奏上するならわしとなっていて、律令制時代まで続いた。これが「国栖の奏」である。この由来としては、『日本書紀』応神十九年冬一〇月に、吉野の離宮に行事があり、時に国栖人が参向し、醴酒を天皇に献上し、「檀の生に 横臼を作り 横臼に 醸める大御酒 うまらに 聞き持ち食せ まろが父」と歌い、歌い訖ったときに口を打って仰ぎ笑った。今でも国栖が土毛を献上するとき、そうした作法があるのは、その遺風であると記している。そして、この国栖について、「その人とな

り甚だ淳朴なり。毎に山の菓を取りて食ふ。亦蝦蟇を煮て上味となし、名づけて毛瀨といふ。その土は京より東南、山を隔てて吉野河の上にあり。峯険しく谷深くして、道路狭く嶺し云々」と記してある。

律令制になってからも、大嘗祭の卯の日の行事に、この吉野の国栖十二人が檜笛工十二人と共に参入し、古風を奏したことが、「貞観儀式」や「延喜式」に記されている。

ちなみに、この国栖の奏は、現在、南国栖の吉野川に臨んだ嶮崖の洞穴に、淨見原神社（天王社ともいう）の小祠があり、天武帝をまつたと伝えられるが、毎年二月十四日の例祭には、神前で国栖奏が奉納され、遺風を伝え、腹赤の魚（ウグイ）、醸酒（あまざけ）、土毛（根芹）、山菓（木の実）、毛瀨（蛙、かに）を供えるのである。

それにしても、この国栖の奏の意味は、一体何であろうか。私は、おそらく、この吉野の異域からやって来る異人「国栖人」の持つ靈性を、天皇の身にふりつけ、天皇の靈威を強化せしめるためのものであったと考えている。同じ大嘗祭卯の日の行事に、南九州の蛮夷とされる隼人らの風俗歌舞があり、やはり御前で奏せられた。隼人は一名熊襲とも呼ばれ、一般人と言語・風俗を異にした異族とされ、しばしば皇威に反したが、不思議なことに、この根拠地であった日向、大隈、薩摩三国（古くは日向一國であったが、奈良時代に三国に分化）は、記紀においては、天皇家の先祖の日の御子たちの住んでいた地と伝えられ、天孫降臨の聖地でもあった。この隼人たちの祖先は、例の海幸彦ホスセリノミ

コトであり、皇室の祖先ヒコホホデミと兄弟神であったと記紀に記されている。

この子孫といわれる隼人の奏する隼人舞が、天皇に服属を誓う、一種の服属儀礼であったことは、確かであるが、そのほかに、隼人の持つ靈性を摂取し、天皇の靈威の強化を図るという、呪術的意味があったことは、感知できよう。国栖人の場合とも同じである。

神武天皇の東征説話は、津田左右吉氏なども論じるように、何等かの史実を基にしたものでなく、大和盆地に位置して、全国を統一した六―七世紀の大和朝廷の貴族たちが、作り出した王朝起源伝説というべき説話にすぎないが、それでも、何等かの心理的・信仰的基盤はあったと思われる。神武帝は、異境の地であり、かつ神靈のゆかりの地であるとされた日向を発し、後世、これも靈界の地とされた熊野（これは後で述べる）を通り、神秘境吉野を通して、大和盆地に入ったことになり、ここではじめて位に即くのである。要するに、天皇家の祖先は、神靈の世界から出て来たのであるという、古代思想の説話化に他ならない。こうした東征説話が形成されて行ったのは、もちろん隼人や国栖らが、大和朝廷に服属した五、六世紀以降のことであろう。

ところで、この吉野の地の考古的徴証はどうであろうか。大淀町桜ヶ丘に残る縄文前期から中期にかけての住居跡や石切場跡、また阿田、越部、北六田、丹治、上市、宮滝、国樺などの、吉野川沿岸各地に散在する縄文時代から弥生時代にかけての遺物・遺跡などから推すと、恐らく瀬戸内海から紀ノ川をさかのぼった先史時代人が、ここで漁撈や狩猟を営んでいたであろう。これらが、やがてこ